

夢を風にのせて

頼 玲瑛

頼助産院(金沢市)

開業助産婦の大先輩である正木かよ先生よりバトンを受けさせて頂いた。

「助産婦雑誌」といえば、全国の助産婦の必読(愛読)書であろう。私も看護婦として産婦人科へ勤務していた頃から、助産婦になるつもりで読んでいた頃、ホヤホヤ助産婦の頃、開業助産婦の現在まで、はや10年の付き合いだ。専門職である助産婦にとって、情報誌でもあり、座右の書とも言える。その本に私が文章を書くことになるとは、あまりの重責に、はてさてどうしたものかと思案しつつペンをとっている。

どうして助産婦になったの？

最近、特に開業してから、この種の質問が多い。身近なところでは、私の助産院へ来院するお母さんたちから、はては新聞等の取材記者までによく問われる。無精な私は、看護婦のようにオールマイティに何でもできるほどの器用さを持ちあわせなかったから……とまずは返答する。実のところは、当時、産科と小児科の間でようやく光があたりはじめた新しい分野である周産期に興味があったから、もっと簡単にいえば、新しい命の誕生の不思議と素晴らしさに魅せられたからである。

ホヤホヤの新人時代……

助産婦って大変!!

私は看護婦時代を大学病院で、助産婦としての新人時代は周産期のハイリスクを中心とする高度医療を担う病院で経験を積んできた。現在、開業助産婦の自身を振り返ってみれば、当時の学びや気づきの多くが今の自分の基礎になっていることをあらためて実感する。その中の多くは、専門家

である助産婦たちとの出会いから生まれている。

年齢も幅広く、看護婦の時は先輩助産婦を尊敬の目で眺め、同じ仲間になってからは、各々の個性の中にプロとしての知識・技術の奥深さと、ライセンスを持つ者としての責任の重さを肌で感じた。それとともに、その人の人となりや人生の先輩として学ばせて頂いた。当時は50代から60代の経験豊富な助産婦と、娘か孫のような私がいっしょに勤務できたわけであるから、今では願っても叶わないことかもしれない、貴重な経験である。

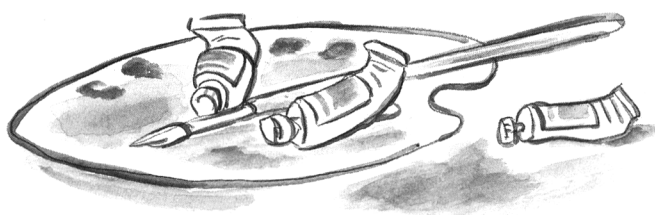
一方病院では、医学的な進歩は目ざましく、現在ポピュラーなMEや種々の検査についても習熟できたことは、現在の私の助産院での適切な判断材料のための手段として、考える基礎になっている。

助産婦って何？

病院で助産婦としての経験を積んでくると、自ずと「助産婦って何？これが助産婦の仕事？」と問うようになる。かわる患者さんたちと業務との間で葛藤を感じるのは日常のことで、思いが深ければ深いほど悩むことも多い。

病院での医師主体のお産に疑問を感じ、助産婦本来の主体性と専門性を求めても、施設の枠の中では困難な現状である。八方塞がり、手探りの中で、形にならない何かを求めて私が最後に門を叩いたのは、大阪のM助産院であった。

「夢をもって。あとは勇気!!」この言葉を励みに、開業助産婦の仲間入りをしたのが1990年10月である。幸いなことに、周囲の人たちの協力を得て、とにかく小さな手作りの看板を掲げた。診察室はベッドひとつと、自分が学生の頃から使っていた



机ひとつきりである。そしてこれは現在も変わらない。

待つこと1年。武士は食わねど高楊枝、石の上にも3年。実際それらしい仕事ができるようになったのは2年めからである。

常に心がけていることは、自分自身をフレキシブルに保つことである。型にはまらず、周囲の要望に対して、そのニーズの本質を探り、対象に合わせて可能な範囲で対応し、それぞれの場面で誠実に一生懸命つとめること、そしてその中にささやかながらも自分を生かすことである。

開業して大きく変わったことは、自分が世の中の動きに敏感に現実的になったこと。非常にダイレクトに情報が響いてくるからである。社会が助産婦に求めていることに、自分が気づきはじめているように思う。日々接するお母さんたちの声は、広く社会の声である。病院という大きな組織とはまったく異なる、小さな助産院のただ1人の助産婦に、素直な声をきかせてくれる。

開業助産婦にとっては、その一場面それぞれが専門家としての真剣勝負である。しかし、決して勝つのではなく、1人ひとりの思いを受けとめ、よいお産、楽しい育児への援助を惜しまないことが大切だ。

開業3年め、相変わらず試行錯誤、ドタバタの日々である。毎日子どもたちの泣き声と笑いの中でアッと言う間に時間が過ぎていく。

この小さな助産院の玄関のベルを押したお母さんたちの数は300名を越えた。励まされ、教えられ、育ててもらっているのは、実は自分であると感じている。そして時とともに、後戻りできなくなっている現状に、少し困っているのも正直なと

ころである。

開業助産婦の1人として

この「助産婦雑誌」を手にとる人たちは、多分助産婦であろう。普通の人たちに、女性の一生に大きくかわる存在として助産婦が存在することを伝える必要を強く感じるのは、私1人ではないはずである。

助産婦は、絶対数が少ない職種であるがゆえに、施設ではユニフォームが看護婦と変わらぬこともあって一般の人たちにはどうも区別がつかないようである。施設の中で助産婦としての自分を生かす道もあれば、開業することで助産婦の生き方を模索する道もある。それぞれが尊重されるように願うとともに、開業助産婦として、今学ばねば途絶えてしまうかもしれない先輩方の知識と技を受け継ぐ機会が得られればと思う。

「万が一、助産婦さんがいなくなったら誰が困るのでしょうか？」先日取材に訪れた記者の言葉である。胸がズキンと痛んだ。そんなこと絶対あってはならないという言葉を読み込んで、「多分、すべてのお母さん、女性たち……」と声をつまらせた。助産婦が助産婦であり続けること……早急に対処を要する課題であろう。

隣の部屋から、つい数時間前に生まれた小さな命の声が聞こえる。誕生のうぶ声と無垢な魂、輝く瞳に幸多かれと願いつつ、思いをあらたに、もう一步、歩みを進めよう。

* * *

次のバトンには、京都の清洲さんをお願いします。お互い同じ助産婦であってもそれぞれの人生を生きています。ユニークな目でどうぞよろしく。